

# 宮崎リンネ會報

Annals of Miyazaki Linnean Society

第 1 2 號

昭和 23 年 5 月 5 日

宮崎リンネ會發行

頁	行	誤	正
1	17	ウシア虫	ウシアブ
1	27	Krober	Krober
5	7	若村重道	若林重道
4	23	鵜戸村. <sup>19</sup> / <sub>V</sub> -47	鵜戸村. <sup>19</sup> / <sub>V</sub> -41

## 宮崎リンネ會報 第12號 目次

復刊の言葉	中島茂	
宮崎縣の蛇類について(豫報)	松澤寛	1
宮崎縣産植物目録補遺	平田正一	2
稻刈取前後のニクワメイガ及びサンクワメイガ	松澤寛	5
	宮崎師範女子生物學専攻生	
ドクダミ(莖葉)の浸出液による稻の發芽實驗	佐々木美代子	8
二つの觀察	濱砂浩子・西岡眞佐子	9
熱帯産の珍菌( <i>Garoderma colossum</i> Fr.)初めて日向で發見	平田正一	10
ダーウイニズムの史的考察	桑原達三郎	11
採集を通して見た昆虫の個体数について	清水薫	13
宮崎リンネ會會則 高鍋支部會則		14
宮崎リンネ會例會並採集會記錄		16
昭和22年度生物研究發表會及び生物採集展覽會記錄		18
宮崎リンネ會會員名簿		19

## 復刊の言葉

中島茂

本會誌も第11號(昭和14年)を最後として暗く寒い戰と云ふ冬に追ひこまれてゐたがここに暖い平和の春のおとすれを迎へ、尙加へるに會員の熱望と幹事各位の盡力に答へられて、長い冬眠より覺めて活動をはじめました。これは何んと云ふ慶びでしょう!

もとより本會は普遍性を持つことが特徴であります。即ち誰でも何時でも又何處からでも加はり共に生物學を愛好しようとする會でありますから本誌の上にもこの心持を生かしてよい生長と發展を希つて止みません。

一言を述べて復刊に對する慶びの辭とします。

# 大日靈とI翁 博會本（神宮）

第一編 中	第一編 中
第一章 緒言	第一章 緒言
第二章 大日靈	第二章 大日靈
第三章 大日靈の神格	第三章 大日靈の神格
第四章 大日靈の神名	第四章 大日靈の神名
第五章 大日靈の神位	第五章 大日靈の神位
第六章 大日靈の神職	第六章 大日靈の神職
第七章 大日靈の神宇	第七章 大日靈の神宇
第八章 大日靈の神像	第八章 大日靈の神像
第九章 大日靈の神符	第九章 大日靈の神符
第十章 大日靈の神樂	第十章 大日靈の神樂
第十一章 大日靈の神託	第十一章 大日靈の神託
第十二章 大日靈の神蹟	第十二章 大日靈の神蹟
第十三章 大日靈の神威	第十三章 大日靈の神威
第十四章 大日靈の神徳	第十四章 大日靈の神徳
第十五章 大日靈の神徳	第十五章 大日靈の神徳
第十六章 大日靈の神徳	第十六章 大日靈の神徳
第十七章 大日靈の神徳	第十七章 大日靈の神徳
第十八章 大日靈の神徳	第十八章 大日靈の神徳
第十九章 大日靈の神徳	第十九章 大日靈の神徳
第二十章 大日靈の神徳	第二十章 大日靈の神徳

## 大日靈の神徳

### 第一編 中

大日靈の神徳とは、神の徳性を示すものである。神の徳性は、神の神格、神名、神位、神職、神宇、神像、神符、神樂、神託、神蹟、神威、神徳などによって表現される。大日靈の神徳は、神の神格、神名、神位、神職、神宇、神像、神符、神樂、神託、神蹟、神威、神徳などによって表現される。大日靈の神徳は、神の神格、神名、神位、神職、神宇、神像、神符、神樂、神託、神蹟、神威、神徳などによって表現される。

## 宮崎縣の虻類について (豫報)

松澤 寛

(宮崎師範學校)

### は し が き

宮崎縣の虻類については、從來殆んど調べられていないが、毎年相當の發生をみる様である。北諸縣郡、南那珂郡の一部は特に顯著で、場合によつては、牛馬の使役にも甚だ困惑することがあるとゆう。筆者はこゝへ、二年本縣の虻について調査し、二三の資料を得たのでこゝに簡単にまとめてみる。

本稿を草するに當り種名の査定に御骨折いたゞいた北大農學部高橋弘氏に厚く御禮申上げる。

### 1. 虻 の 種 類

從來迄の調査により、筆者は次の11種を得ることが出來た。特に注目すべき種類は見當らないが、モノミアニ(※印)は新種であつて、近く高橋(北大)長澤(京大)兩氏によつて發表されることになつてゐる。一見クロハナアブの如き小形種(体長1.4cm内外)で、全体黒色、腹部背面はやゝ光澤に富む。翅は少しく暗色をおび、翅脈は黒褐色である。

- |   |           |
|---|-----------|
| 1. <i>Tabanus (Tabanus) trigonus</i> Coquillett           | ウシアアブ     |
| 2. <i>T. (Tabanus) rufidens</i> Bigot                     | ヤマトアブ     |
| 3. <i>T. (Tabanus) mandarinus</i> Shiner                  | シロフアブ     |
| 4. <i>T. (Tabanus) takasagoensis</i> Shiraki              | ギシロフアブ    |
| 5. <i>T. (Tabanus) amaenus</i> Walker                     | タイワンシロフアブ |
| 6. <i>T. (Tabanus) fulvimeidioides</i> Shiraki            | キスヂアブ     |
| ※7. <i>T. (Tabanus) monomiensis</i> Takahashi et Nagasawa | モノミアブ     |
| 8. <i>T. (Ochrops) horvathi</i> Szilady                   | ホルバートアブ   |
| 9. <i>Chrysops (Chrysops) japonicus</i> Wiedeman          | クロメクラアブ   |
| 10. <i>C. (Chrysops) basalis</i> Shiraki                  | キゴシメクラアブ  |
| 11. <i>C. (Heterochrysops) van-der-wulpi</i> Krober       | ヨスヂメクラアブ  |

以上で大体分る様に、本縣の虻類も東北、北海道地方と殆んど同様な種類である。しかし北方系の *Tylostypia* 亞屬のものが見當らないのは、やはり本縣の特殊性を示すものであらう。

### 2. 發 生 時 期 其 他

發生時期に関しては未だよく、調査を行つていないが、4、5月頃に最もよく

見かけるものはクロメクラアブで、6月頃になるとキスチアブ、ヨスチメクラアブ等もよく見られる。盛夏にはウシアブ、シロフアブ、ヤマトアブ、ホルバートアブ等多く出現し、特に兒湯郡地方のウシアブ、南那珂郡、北諸縣郡地方のヤマトアブの發生は、注目すべきである。其他のものも大体盛夏の候に多く出現するが、左程發生は多くない。

虻類は一般に幼虫にて越冬するが、水田地帯に發生するものは秋季よく稲稈中に穿入する。稲藁、刈株中で越冬するのも知れない。

筆者が昨年(1947年)秋宮崎市下北方水田で行つた螟虫調査の際、刈株、稲藁中に明かに數頭の成熟幼虫を見受けた。

## 宮崎縣産植物目錄補遺

平 田 正 一

(宮崎農林専門學校)

1937年公表された宮崎縣産植物目錄※に、最近採集されたもので、一應同定整理の完了したものを原著者の承諾を得て茲に41種15變種1亞變種を追加する

### ウラボシ科 (Polypodiaceae)

イヌチヤセンシダ (西米良村村所,  $\frac{3}{M}$ —46), ヒメウラジロ (西米良村村所,  $\frac{3}{M}$ —46), オクマワラビ (小林町,  $\frac{17}{M}$ —47, 永井彪), サジラン (尾鈴山,  $\frac{11}{VIII}$ —46), サイコクホングウシダ (双石山,  $\frac{27}{X}$ —46), イヌガンソク (祖母山,  $\frac{16}{VII}$ —46), ハゴロモシダ (青島村内海,  $\frac{29}{V}$ —47)

### セキチク科 (Caryophyllaceae)

ユハコベ (本校構内,  $\frac{4}{X}$ —47), ヤマハコベ (尾鈴山,  $\frac{12}{VIII}$ —46)

### ヒツジグサ科 (Nymphaeaceae)

ヒツジグサ (妻町,  $\frac{24}{IX}$ —47)

### キツノボタン科 (Ranunculaceae)

ヤマシヤクヤク (鰐塚山,  $\frac{10}{III}$ —47, 若林重道), ケキツノボタン (宮崎市,  $\frac{16}{V}$ —47)

※Iwao Hino and Sigeru Endo: List of Vascular Plants Found in Miyazaki Prefecture, Bull. Miyazaki Coll. Agr. For., No.9, 1937

## ツヅラフヂ科 (Menispermaceae)

イソヤマアヲキ (市木村幸島,  $\frac{10}{V}$ , —47, 双石山,  $\frac{24}{III}$ , —41, 若林重道)

## ユキノシタ科 (Saxifragaceae)

チヤルメルサウ (西米良村村所,  $\frac{2}{M}$ , —46)

## マメ科 (Leguminosae)

ホド (祖母山,  $\frac{17}{VII}$ , —46), ジヤケツイバラ (小林町,  $\frac{6}{M}$ , —47, 佐土原町,  $\frac{19}{III}$ , —41, 若村重道), ヤブハギ (宮崎市下北方,  $\frac{10}{V}$ , —47), イタチササゲ (祖母山,  $\frac{17}{VII}$ , —41), ハヒメドハギ (宮崎市下北方,  $\frac{18}{V}$ , —47), ヤブツルアヅキ (青井岳,  $\frac{17}{X}$ , —47, 鶴塚山,  $\frac{21}{K}$ , —41, 若林重道) クララ (野島,  $\frac{29}{III}$ , —47, 北川村,  $\frac{10}{VII}$ , —47)

## スミレ科 (Violaceae)

エゾスミレ (祖母山,  $\frac{10}{M}$ , —47, 灣洞越,  $\frac{31}{VII}$ , —41, 若林重道)

## カラカサバナ科 (Umbelliferae)

ムカゴニンジン (穂北村,  $\frac{50}{III}$ , —47)

## フヂウツギ科 (Loganiaceae)

アキナヘ (本校構内,  $\frac{15}{VIII}$ , —47)

## リンダウ科 (Gentianaceae)

ムラサキセンブリ (法華岳,  $\frac{17}{M}$ , —46, 青井岳,  $\frac{5}{M}$ , —40, 若林重道, 祖母山,  $\frac{10}{M}$ , —47, 永井彪)

## ガガイモ科 (Asclepiadaceae)

クサタチバナ (野島,  $\frac{29}{III}$ , —47)

## クチビルバナ科 (Labiatae)

シソバタツナミ (本校構内.  $\frac{7}{\text{VIII}}$ , —46), ヒメシロネ (新田村.  $\frac{21}{\text{K}}$ , —47)

## ゴマノハグサ科 (Scrophulariaceae)

キクモ (妻町.  $\frac{21}{\text{K}}$ , —47), カハジシヤ (野島.  $\frac{27}{\text{III}}$ , —47), タチイヌフグリ  
(本校構内.  $\frac{15}{\text{III}}$ , —47), ヒヨクサウ (本校構内.  $\frac{33}{\text{V}}$ , —47), オホイヌフゲ  
リ (本校構内.  $\frac{15}{\text{III}}$ , —47), ムシクサ (本校構内.  $\frac{10}{\text{III}}$ , —47)

## オホバコ科 (Plantaginaceae)

ヘラオホバコ (本校構内.  $\frac{15}{\text{II}}$ , —47)

## キキヤウ科 (Campanulaceae)

ムラサキホタルブクロ (宮崎市.  $\frac{33}{\text{V}}$ , —47, 渡邊久夫)

## キク科 (Compositae)

タウコギ (妻町.  $\frac{21}{\text{K}}$ , —47), カセンサウ (本校構内.  $\frac{3}{\text{VIII}}$ , —47, 永井彪) オヤ  
マボクチ (祖母山.  $\frac{10}{\text{M}}$ , —47, 永井彪), カナダアキノキリンサウ (宮崎市.  $\frac{15}{\text{III}}$ ,  
—46), オニノゲシ (宮崎市.  $\frac{19}{\text{V}}$ , —47)

## ホモノ科 (Gramineae)

ウスゲカモヂグサ (本校構内.  $\frac{40}{\text{V}}$ , —47, 永井彪), ハマヒエガヘリ (青島村.  $\frac{1}{\text{V}}$ ,  
—47)

## カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

アゼガヤツリ (妻町.  $\frac{21}{\text{K}}$ , —47), オホテンツキ (宮崎市.  $\frac{15}{\text{K}}$ , —47, 森田豊彦)  
アイバサウ (妻町.  $\frac{21}{\text{K}}$ , —47)

## ツユクサ科 (Commelinaceae)

シマイボクサ (宮崎市.  $\frac{30}{\text{K}}$ , —47)

## ユリ科 (Liliaceae)

キキヤウラン (大堂津.  $\frac{9}{\text{V}}$ , —47, 鶴戸村.  $\frac{19}{\text{V}}$ , —47, 若林重道), キスゲ (祖  
母山.  $\frac{17}{\text{III}}$ , —47), シロバナヤブラン (日向ライン.  $\frac{10}{\text{VIII}}$ , —47, 佐野フヂ子)

## ラン科 (Orchidaceae)

マメヅタラン (青井岳・ $\frac{17}{X}$ —46), ミヤマムギラン (北川村・ $\frac{17}{VII}$ —47), サイ  
 ハイラン (鰐塚山・ $\frac{20}{VIII}$ —41, 日野巖), キバナノセキコク (飯肥町・ $\frac{8}{VIII}$ —46),  
 ベニカヤラン (西米良村村所・ $\frac{3}{XI}$ —46)

註; 採集者を示さざるものは著者の採集による。

## 稻刈取前後のニクワメイガ及びサンクワメイガ

松 澤 寛, 生物學專攻女子學生  
 (宮崎師範學校)

### は し が き

越冬準備期に入るニクワメイガ *Chilo simplex* Butler 及びサンクワメイガ *Schoenobius incertellus* Walker 幼虫の棲息状態に關し、より明確なる知識を得るために宮崎市の水田について本観察を行つた。其概要は次のようである。

### 1, 棲 息 部 位

稻が成熟する頃には外氣の温度も可成り下降するようになり、又一方稻の上方から次第に乾燥して來るので、之まで稈の上方で生活して居た幼虫は次第に下方へ下つて來る。此の移動は可成り顯著なものであつて、上位に棲息して居たものが數節間を素通りして一氣に下降する傾向は觀察中しばしば認められた。刈取直前になると殆んど大多數の幼虫が刈取部以下に下るものらしく、最下低に達すると或幼虫は一時体の向をかへて上向になつて一時待機するものがある。個体數と定位場所について觀察したところを示すと第1表の如くである。

第 1 表 定位場所と個体數

定 位 場 所	個体數 (刈取2週間前)		個体數 (刈取1週間前)	
	ニクワメイガ	サンクワメイガ	ニクワメイガ	サンクワメイガ
地 中 部	24 (24)	33 (33)	23 (20)	102 (102)
地表—上方10cm	42 (19)	32 (32)	65 (54)	34 (29)
10cm—20cm	27 (17)	25 (22)	15 (9)	10 (10)
20cm以上	14 (14)	14 (14)	1 (1)	0 (0)
計	107 (74)	104 (101)	103 (84)	146 (141)

( )内は觀察得數

## 2. 1程中の棲息個体数

兩幼虫は時により同一程内に棲息することもあるが、多くは別々の程内に棲息して居る。1程中の個体数はサングワメイガにあつては通常1—2頭であるがニクワメイガにあつては時により極めて多數のことがある。今1程中の個体数と棲息稈数について示すと第2表の如くである。

第2表 1程中の幼虫個体数と棲息稈数

A ニクワメイガ					B サングワメイガ				
1程中の 個体数	刈取2週間前		刈取1週間前		1程中の 個体数	刈取2週間前		刈取1週間前	
	稈数	%	稈数	%		稈数	%	稈数	%
1	63	87.5	69	89.6	1	96	96.9	120	97.0
2	3	4.2	1	1.3	2	3	3.0	4	3.0
3	2	2.8	6	7.8					
4	—	—	1	1.3					
6	2	2.8							
7	1	1.4							
11	1	1.4							

兩幼虫の混棲する場合は左程多くはないが、刈取2週間前に於いて二化1三化1が2例、刈取1週間前に於いて二化1三化1が4例、二化2三化1が2例、二化2三化2が1例あつた。

## 3. 幼虫の大きさ

稲の成熟期が近づいても、幼虫の中には可成り多くの若齢のものが見られるが、刈取直前には大部分のものが成長を遂げるようである。今幼虫の大きさと個体数について示すと第3表の如くである。(但100頭宛)

第3表 幼虫の大きさと個体数

体長	個体数 (刈取2週間前)		個体数 (刈取1週間前)	
	ニクワメイガ	サングワメイガ	ニクワメイガ	サングワメイガ
21—23mm	10	8	41	32
16—20 "	42	39	42	60
10—15 "	36	43	15	8
5—10 "	12	10	2	0

尙調査中体長25mmのニクワメイガ幼虫 1頭を発見したが上表からは除外した。

## 4. 下北方水田に於ける稻株中の棲息状態

之の調査は刈取後約10日を経た宮崎農専下北方水田(品種—神力、瑞豊、株間一尺)について行つた。道路を距つた中央附近の7水田を選び、その中の4水田は1間平方の框を任意に5箇所宛設けることにより框内の刈株を、他の5水

田は 2つの對角線上の100株宛都合200株を観察することによつて調査を行つた植物群落の調査法を適用してみたのである。此の際各株の分蘖數が問題になる場合も考へられるが、こゝでは便宜上一株を一棲息所と見做して結果を數字で示して見た。 第4表及び第5表として次に掲げる。

第4表 1坪平均棲息株數及棲息頭數(框法)

調査區	框號	株 數	棲 息 株 數		棲 息 頭 數	
			株 數	%	ニクワメイガ	サンクワメイガ
I	1	49	12	24.4	16	0
	2	49	14	28.6	17	1
	3	49	11	22.4	13	0
II	4	49	11	22.4	12	1
	5	49	10	20.4	11	0
	6	49	8	16.3	7	2
III	7	49	13	26.5	16	1
	8	49	21	42.8	25	0
	9	49	16	32.7	19	0
平均		49	11.3	24.0	15.1	0.6

第5表 100株平均棲息株數及頭數(對角線法)

調査區	株 數	棲息株數	棲 息 頭 數	
			ニクワメイガ	サンクワメイガ
I	100	22	34	1
	"	23	48	0
II	"	25	28	0
	"	23	24	0
III	"	15	16	0
	"	26	29	0
IV	"	21	24	1
	"	30	33	1
平均	100	26.3	30.8	0.33

上表に示した様に一坪平均の棲息株數は24%内外であつて、可成り棲息密度の高いことを思はせる。對角線法による調査に於いても26.5%となつて同様の結果を示して居る。本年は相當に三化螟虫の被害が大であつたが、刈取後の稻株中の棲息密度は非常に小さい様で此の様な傾向は兒湯郡西部地方、宮崎郡等の水田についてもみられた。前述の如くサンクワメイガも刈取頃になると程の

下方に殆んど下降するのであるが、刈取後は或ひは他の適当な場所を求めて移動するのも知れない。

女子學生氏名

小柴ミキ、川越キクヲ、田中點子、西森ミエ子、淵上ミチ、矢野笑子  
青木信子、荒武和子、白杵アヤ子、江口八重子、川崎克、菊田ツヤ子  
態迫幸子、黒木トシ子、日高カズエ、平島文子、松崎美雪、宮尾淑子

## ドクダミ(莖葉)の浸出液による稻の發芽實驗

佐々木美代子

(宮崎師範學校)

### 1. 實驗方法

生のドクダミの莖葉を1cm巾に刻み、其10grを100ccの水に一晝夜浸出したものを原液とした。實驗は原液、2倍液、5倍液、10倍液及び比較のため水のみ標準區を設け、各區について内徑8.6cm、内深2cmのシャーレ1個宛を用意した。各々のシャーレには底にガーゼをしき、其上に玄米100粒宛を入れ、供試液10ccを注いで蓋をした。觀察測定は2日目から始めた、1週間に亘つて毎日發芽(根)及び其後の伸長状態を測定觀察した。

### 2. 實驗成績

以上の如き準備、方法によつて行つた成績は第1表及第2表の様である。但し+印は發芽(根)の萌兆を示す。單位はmm

第1表 芽の伸長(平均)

區	日次	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	※7日目
原液	—	—	0.21	3.83	8.24	11.24	23.43
2倍液	—	—	1.25	6.69	9.77	16.75	24.95
5倍液	+	—	2.02	8.03	11.62	15.73	21.97
10倍液	++	—	2.71	7.46	13.54	19.23	29.60
標準	+	—	2.00	8.14	10.92	18.65	25.70

第2表 根の伸長(平均)

區	日次	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	※7日目
原液	—	—	1.62	3.56	6.53	11.71	17.46
2倍液	+	—	2.11	11.27	24.20	31.30	34.49

5 倍液	+	5.66	18.20	34.27	35.10	37.39
10 倍液	++	6.38	18.98	30.04	35.98	42.02
標 準	+	4.33	11.91	23.20	30.92	31.90

前掲の表により根及芽の伸長状態を大体知ることが出来るが、※印を附した第7日目の数字は、餘り乾燥がひどいために前日の観測後各シャーレに新に10cc宛の水を加へた影響が出ているかも知れない。

### 3. 發 芽 率

實驗中各區の發芽率についてはくわしくのべないが、第6日目に於いては原液區60%で他は85-90%であつた。

### 4. 要 約

1. 10倍液、5倍液の場合には明らかに標準區よりも發育伸長が著しい。
2. 10倍液、5倍液にあつては、發芽前兆の現はれる速度も一番早かつた。
3. 原液は芽、根何れの場合も成績不良であつた。
4. 發芽率の一番悪いのは原液區で、又發芽前兆の現はれも一番遅かつた。

## 二 つ の 観 察

(妻高女生物班)

### 1. ゲンジボタルの發光について (濱砂 浩子)

昨年(1947)年6月數回に亘つてゲンジボタルの發光についてしらべた。此の様な觀察はなるべく多數の虫を取扱うべきであるが、不馴れな自分には思ふようにそれが出来なかつた。次に簡単にそのしらべたところを示す。

ボタル番號	1 (雄)	2 (雌)	3 (雄)	4 (雌)	5 (雄)	6 (雌)	平均
自然状態	26	24	23	23	22	19	22.8
掌 中	52	55	60	52	62	48	54.8
昆虫針ニヨル固定	74	62	72	68	79	72	71

### 2. 蛙卵の發生觀察 (西岡眞佐子)

蛙卵の寒天質をとり除いたもの12粒(A)、正常のもの12粒(B)を用いてその發生特に發育速度を比較觀察した。

1. 2分割になる速度は平均してBの方が少しく速かつた。8日目に於ける2分割完成の数はA=5、B=8であつた。

2. 分割は2分割に引つづいて起り、9日目にはA=5、B=5 (但し9日目から

Bの總數は9に減らした)であつた。

3. 8分割が引つづいて起つたがB區のものはやはり一層進行していた。

4. 頭部、尾部の形成もやはりB區の方が速かつた。

5. 觀察期間は40日であつたが、A區では中途で死亡するものが多くなり半分以上死んだ。

## 熱帯産の珍菌 *Ganoderma colossum* (Fr) 初めて

### 日向で發見

平 田 正 一 (宮崎農林専門學校)

昨年(1947)10月24日本校學生橋本正君が宮崎刑務所東方の民家の庭で、柿の木の切口に發生した大型のキノコを採集された。一見サルノコシカケに見へるもので普通の茸の様な柄は全くない。乾燥しても腐れず、上面全体は鮮かな淡黄色で内部は海綿狀の弾力ある實質で、下面稍平に菌管孔部のある塊狀のものである。採集されたものは長さが47cm. 厚さ15cm.もある大型のものであつた。

本校所蔵の標本でも、又私共も今迄みかけなかつたので同定もできず、早速この道の専門家である今關六也先生の所に送つて鑑定を御依頼したところ、*Ganoderma colossum* であることが分つた。

この菌は最初の發見は熱帯アメリカであつて、その後アフリカ及び印度から新しい名で發見、發表されたものであると云ふ。

*Ganoderma* 屬のものは一般にマンネンタケ或はサイワイタケ靈芝の名でよく知られたもので、通常柄も傘もある硬い茸であつて塊狀のものは少いのであるが、發見されたものは全く *Ganoderma* とは想像もつかないものであつて分類學上すこぶる興味の深い茸である。

日向で發見された熱帯産のキノコは今迄にフルヒタケ、*Evolutus Fmerici*, シママンネンタケや大型の *Lentinus Tuber-regium?* 等があり、其他私達の採集したもので本邦未記録の種類も2—3ある。

高等植物の分布と同様に下等な孢子によつて種屬を撒布するキノコの類も、日向が丁度熱帯區系の境界附近に位置することから考へるならば最もであつて斯様な菌の存在も珍しいことではなからう。

年雨量5500mm. 年間平均氣温17°Cをもつ南日向は、熱帯降雨林とも稱すべき、所謂熱帯のジャングルに匹敵する原始林から成立つてゐて、學問的にも未

開の地である。この地帯の生物の究明は植物地理學的にも最も興味深いものがあると思ふ。會員の皆さん私達の日向は私達で徹底的に解明させよう。今關六也先生は東京都目黒區下目黒の農林省林業試験場に居られる。

## ダアウィニズムの史的考察

桑原達三郎

(宮崎農林専門學校)

ダアウィンがダアウィニズムを提唱した頃の英國は産業革命から百年を經、資本主義は漸く成熟の域に達し農業方面も次第に資本主義化し飛躍的に發展しつゝあつた。農業(廣義の)の發展は栽培植物や飼育動物に關する夥しい文献が書かれた。ダアウィンは其等を自由に讀む條件に恵まれ、其の當業者等と交り淘汰を常に目前に體驗してゐた。又、産業革命は生産を膨脹せしめ原料の入手と販路の擴張の必要が起り、機械の使用は勞力の節減となり政策的移民殖民が行はれる様になつた。其の爲に多くの探檢船が世界各地に派遣され、ダアウィンの名を爲さしめたヴィグル號もその一に過ぎない。此等の探檢船や冒險者が齎した世界の生物に關する資料は、當時の新機運にある科學者達を大いに刺戟した。

ダアウィンとウォレスとを感動せしめたマルサスの「人口論」は當時の資本主義の理論を説いた著書であり、進化論が社會思想とも密接な關係が有る事を物語る好例である。

生物進化の思想は既にギリシヤ時代より芽生へてゐたが十六世紀の末迄全く忘れられてゐた。その原因は廣く世界の生物を識る事が出来なかつた事にもあるが、ラマルク説を採消し五十年の暗黒な時代を再び齎したのは宗教の影響である。此の時代は宗教が科學の領域にも侵入するのが常であつた。例へば化石に關してキユビエは聖書のノアの洪水と結付けた事、又、リンネすらも「生物の種の數は天地の始め神の作り給ふたゞけ有る」と言つた程である。而しルネツサンスの機運が起ると共に、ライエルは「破壊説に疑惑を抱きその誤謬を論破した。而して他の科學者等も宗教に對抗する勇氣を特つようになつた。ダアウィニズムがそれ程の社會的反撥も無く一般に流布出來た。

素地を作つた學者達の存在を忘れてはならない。

然らばダアウィニズムは現今如何なる批判を受けてゐるか。最も大きな問題は徳變異の遺傳性である。ワイズマンは此れを否定した。次に初發形質の維

持の問題である。此の點はドフリイズの「突然變異説が最も有利である。又退化器官の存在や過適應はダアウイニズムでは説明出来ないのであるが、ラマルク説か直進説か有利である。ヨハンゼン説の發表により種（純種）に對しては分離に依る淘汰の能力は無いと言ふ説である。最後に雌雄淘汰であるが此れも全く無力である。ダアウイニズムは滿身創痍の状態となつたが、進化なる大眞理を劃期的に科學的記載で表現した事の意義は全然失はれてゐない。

次にその影響を考察するに、最も大きな影響を被つたのは宗教である。聖書に含まれる不合理はその非が暴露されたのである。此の革命的思想は相當の迫害を當然豫想された。而しブルジョア的思想のダアウインは生命の起原を神に歸し、人間の進化の記述を差控へたのである。又ダアウイニズム以後、人間社會に適用する事が盛んに行はれた。此の様な事は不可能のみならず有害でもある。科學水準が低く迎合的な民族に多く見られた様である。例へば日本の科學者の中には自然淘汰の理論から服從性の問題を抽出し巧に軍國主義と結付け太平洋戰爭に拍車をかけた人も居る。或學者は人間社會の鬭争の原因を「物資の需要と供給の不均衡に依る」としてゐるが、此れは誤であると思ふ。（勿論その當時の日本は資本主義の内藏する矛盾が凡ゆる方面に問題化し、世界情勢も混亂してゐたのであるが）此の様な事の原因はダアウイニズムの缺點ではなく科學者の狭い世界觀に起因するものと思ふ。次に進化論と直ちに結付いたのは唯物哲學である。人間の腦髓の進化を以てその靈的作用を解決しようとしたのである。又、英國のスペンサーは進化を一切の事物、現象に適用し、進化論的快樂主義なる倫理學の一分科を形成した。

然らばダアウイニズムは充分であらうか。否である。スペンサーやハツクスレイの様な共鳴者でさへも其れを認めてゐる。又ダアウイン自身「種の起原」の第二版に於て自認してゐる。その最大の原因は、當時化石學、分類學、形態學、解剖學等は相當に發達し乍ら、生理學、遺傳學、細胞學等が未だ發達して居ず、根本的普遍的現象、遺傳と變異の機構を明かにする事が出来なかつた事にあると思ふ。

ダアウイン以前の進化論は大體に於て外因的作用に重點を置いたが、その後の學説は何れも生物の内因的作用に基礎を置くようになった。而してその方面の研究は全然染色體の研究に移り、特に實驗が大いに加味されて來た。木原博士のゲノム分析は、ドザブンスキイの「遺傳學的隔離説」と共に世界に誇るべき業績の一つである。

現在の科學界より見ればダアウイニズムは全く古典的存在となり、學説としての重要性は少くなつた。而し科學界には勿論、宗教に哲學に社會全般に絶大な影響を與へた偉大な功績は歴史的に他に之と比べる物を知らぬ者である。

# 採集を通して見た昆虫の個体数について

清水 薫

(宮崎農林専門學校)

採集に依つて得た昆虫が示す種數及び個体數について56人の採集物4291個体を調査した。採集地は主に宮崎縣で、之に僅少の福岡、大分、愛媛縣産のものを含む。採集時期は昭和22年5月から同年11月で7~9月が最も多く採集されてゐる、併乍ら採集時期、採集の難易、調査個体數の僅少等に依り自然の實數と必ずしも一致しないことは考へられる。

1. 各目に於いての個体數の割合は第表1に示せる如くで、即ち13目、4291個体中、最も多いのは鱗翅目の1588個体で57%を占め、次いで鞘翅目950個体22%、蜻蛉目436個体10%の順で、一方少ない方では等翅目、隱翅目が各々2個体である。

第1表 主要目に於ける個体數調査

目 別	直翅目	膜翅目	鱗翅目	鞘翅目	毛翅目	長翅目	半翅目	蜂蠅目	脈翅目	蜻蛉目	等翅目	隱翅目	計
個体數	240	156	1588	950	16	26	330	14	26	435	194	22	4291

2. 蝶亞目及び鞘翅目の主要な16科に於いての各個体數は第2.5表の如くで、蝶亞目に於てはタテハテフ科最も多く284個体を算へ、24%で、次いでジャノメテフ科222個体にて、19%で、最も少ないのはマダラテフ科の16個体である、次に第5表にて總個体數950中、コガネムシ科は274個体で、50%を占め、次にオサムシ科126個体で15%、カミキリムシ科の100個体11%の順である。個体數の少ない方ではエンマムシ科の4個体、次いでマメゾウ科の10個体、ゲンゴロウ科の16個体があげられる。

第2表 蝶亞目主要科の個体數調査

科	アゲハ	シロテフ	マダラテフ	タテハテフ	ジャノメテフ	シジミテフ	セセリテフ	計	備考
個体數	204	146	16	284	222	192	100	1164	

第5表 鞘翅目主要科の個体數調査

科	コガネムシ	ザウムシ	カミキリムシ	ハムシ	テンタムシ	シテムシ	ミヅスマシ	ゲンゴロウ	ガサムシ	ハンメウ	エンマムシ	ガムシ	タマムシ	マメゾウ	クハガムシ	其他	計
個体數	274	48	100	56	66	18	16	34	126	52	4	14	30	10	56	46	950

5. アゲハ、シロテフ、タテハテフの3科の各種の個体数についての調査は第4表の如くで、アゲハテフ科にてはアゲハは總個体数の52%を占め、次はアナスチアゲハ52個体、クロアゲハ50個体の順で、最も少ないのはカラスアゲハの6個体となつてゐる。尙ミヤマカラスアゲハは採集されてゐない。次のシロテフ科ではキテフが最も多く、46個体でモンシロテフは42個体となつてゐる。ヒメシロテフ、ツマキテフ、スチボソヤマキテフ、ヤマキテフは採集されてゐない。之はツマキテフは採集時期を失した爲であり、他は該地方で普通種でないことを示してゐる。

タテハテフ科にては290個体中ツマダロヘウモンとコムスダが最も多く、夫々84個体、70個体で54%を占め、次のヒメアカタテハの夫々2倍以上に及んでゐる。尙少ない方にてはシータテハ、アカタテハ、コムラサキが各2個体となつてゐる。

第4表 アゲハ、シロテフ、タテハテフ各科の個体数調査

科名 種名	アゲハテフ								シロテフ								
	ツヤアコゲハ	キアゲハ	アゲハ	モンアゲハ	ナガサキハ	クアゲハ	ナガサキハ	カラスアゲハ	ミカドアゲハ	計	スダ	シロ	モン	ツマ	キテ	計	
個体数	8	20	66	16	16	30	4	4	52	8	204	14	42	23	16	16	146

種名	タテハテフ														備考		
	ウラギン	ヘモ	グモ	ヘウモ	ノマウ	ヒメ	アガ	ルカ	コミ	イシ	イチ	コキ	ミヘ	キタ		スミ	シタ
個体数	16	8	8	84	34	2	18	70	18	8	2	8	4	4	4	2	290

## 宮崎リンネ會會則

1. 本會は之を宮崎リンネ會と稱す。
2. 本會の事務所を宮崎農林専門學校におき尙必要に依り支部を設ける事が出来る。
3. 本會は生物學及び應用生物學に關する知識の向上を圖り我が國農業發展に寄與するに在り。
4. 本會は前條の目的に賛したるものを以つて組織する。
5. 本會に入會せんとする者又退會せんとする者は書式を以つて幹事に届出で其

の承認を受くる。

6. 本會は左の事業を行ふ。

總會及び臨時總會、例會毎月第三土曜日、見學並びに採集會、會誌の刊行、  
其の他本會の目的に適合する事業。

7. 本會の事務を處理する爲に左の役員をおく。

役員の任期は 1ヶ年とし總會に於て互選するものとする。

會長 1名 幹事若干名

8. 本會に顧問をおくことが出来る。

9. 本會會員よりは入會金五圓年會費拾圓を徵集す。

10. 會費は會誌刊行其他必要な事項に使用する。

11. 本會會則の改廢は總會又は臨時總會に於て出席者の過半數の同意を得て決  
定する。

以上

### 宮崎リンネ會高鍋支部會則

第一條 本支部は本部の會則に示す如く動植物の基礎知識と應用的方面とを研  
究せんとする者をもつて組織す。

第二條 本支部に左の役員を置く。

支部長一名 各校代表委員 教官一名 生徒二名 一般一名

第三條 本支部會員相互の知識向上の爲例會並びに採集會を催す。

第四條 例會並びに採集會の運営については當番校之に當る。

第五條 本支部會員は入會金五圓學會費年拾圓を納める義務がある。

第六條 本支部の事務所は當分高鍋農學校に置く。

第七條 本部の總會に續いて本支部も總會を開き會計庶務の報告役員の改選を  
行ふ。

以上

## 宮崎リンネ會記錄

## I. 總會並例會之部

本會復活第一回總會 昭和二十一年四月二十七日

會期の議決及今後の運営協議

第一回例會 四月二十七日

## 1. ウンカの話

宮崎農試 水谷 吉清

第二回例會 五月十八日

1. 雑草の世界 農專 片山 昭一

2. 昆虫界の益虫大要  
農專 山崎 昭

5. マライの生物  
鍋農 萱島 泉

4. 撓食談義 田村 忠雄

5. 採集キノコに就て  
農專 平田 正一

第三回例會 (兼臨時總會) 六月八日

1. 南方の生物 日野 巖

2. 漫談 日東機工 黒木 芳郎

第四回例會 六月十五日

1. フゲハテフの生態  
農專 山口 福男

2. キノコの話 農專 北島 君三

3. 北支の生物  
第二高女 四本 正秋

4. 人間絶滅論 農專 古川 忠

第五回例會 九月二十一日

1. 甘藷に就て 農專 日高 健一

2. 観察ノート 宮商 井之口希秀

3. 生物學的に見たる分化と統合  
農專 森本 博之

第六回例會 十月十九日

1. 植物採集記 農專 後藤 重喜

2. 蚊の話 宮中 前川登美男

3. 松樹害虫の防除  
縣廳林務課 藤岡 茂樹

第七回例會 十一月十六日

1. 大豆の發芽觀察  
宮中 佐瀬 瞭夫

2. 雌雄問題 農專 西田 周作

第八回例會 十二月二十一日

1. 米良採集談 農專 永井 彪

2. 藥草雜話 坂本 龍七

第九回例會 一月十八日

1. 郷土生物研究懷古談  
女商 栗原 定美

第十回例會 二月十五日

1. 進化論と分類學  
農專 桑原達三郎

2. カビの話 農專 梶原 敏宏

3. 甘藷の病氣に就て  
農專 平田 正一

第十一回例會 三月十六日

1. 甘藷栽培に對する私見  
農專 宮下 武久

2. モヤシとビタミン  
農專 宮崎 義光

3. ヒラタケの胞子撒布  
農專 道家剛三郎

4. ブーゲンビルの自然と住民  
女師 松澤 寛

第十二回例會 四月十九日

1. 花瓣の生化學的研究  
農專 古川 忠

2. 楮の繁殖法 農專 外山 三郎  
昭和二十二年第一回總會

五月十七日

會長決定 役員改選 規則改正 行事計畫

第十三回例會 五月十七日

1. 街路樹に就て

第一高女 野村由紀子

2. 植物の壽命

第一高女 新藤 陽子

3. 鳥の巢箱の實際

鍋農 長友 有人

4. 麥の幼穂形成 宮農 新田 厚

5. 崎型雞の外部及内部形態

宮中 奥野 博司

6. 蜂の社會 第二高女 遠山 敏子

7. 虫壤に就て 宮農 中島 義人

第十四回例會 六月二十一日

1. 植物の性に就て

農專 内山田博士

2. ドクダミの稻の發芽に及ぶ影響

青師 杉山 昭

3. セコイヤに就て

農專 樋口 眞一

4. 兒等の學ぶ生物

女師附 一政久良夫  
第十五回例會 九月二十日

1. 輪虫の話 農專 中山 貫三

2. 作物の播種期に就て  
農專 壇上 勉

3. 縣下の病虫害現狀  
農試 鮫島 徳造

座談 猫の尾は如何なる作用をも  
つか 宮中 四本 正秋

第十六回例會 十一月十五日

1. 植生の遷移 農專 三善 正市

2. 基石蛤の製法 富農 田中 一

3. 有明海の動物 農專 市場 利哉

第十七回例會 十二月二十日

1. D.D.T.の殺虫効果  
農專 平田 正一

2. 白竹に就て 農專 樋口 眞一

第十八回例會 一月十七日

1. 眞珠の話  
縣廳水産課 宮 崎

2. 越冬草本の話 農專 宮川 經邦

3. イモコガに就て  
農專 長友 俊明

座談 白ナマズに就て  
農專 關谷昭二郎

## II. 採集會之部

昭和二十一年度

日向ライン 五月五日

参加者 35名

青井岳 十月十七日

参加者 35名

双石山 十月二十七日

参加者 25名

下北方面 十一月三日

参加者 20名

法華岳 十一月十五日

参加者 23名

昭和二十二年度

杉安方面 四月二十日

参加者 45名

折生迫内海野島 四月二十九日

参加者 2日 48名

神宮社 下北八紘臺 五月十八日

参加者 60名

青島(真期講習會) 七月二十二日

参加者 60名

西都原 七月二十六日

参加者 40名

### 昭和22年度生物研究發表會

日時 十月十七日 會場 宮崎縣教育會館

後援 宮崎縣教育會 日向日々新聞社 宮崎縣學生聯盟

講演 午 前 の 部 (中等學校)

- |                     |         |       |
|---------------------|---------|-------|
| 1. カヘルの畸型           | 宮崎中學校   | 奥野博司  |
| 2. ウーの發生に就て         | 宮崎第二高女校 | 遠山敏子  |
| 3. 稻熟病の調査           | 高鍋農學校   | 中東欣吾  |
| 4. ホシウスバカゲラウの研究     | 宮崎農學校   | 中島義人  |
| 5. 色變りタウモロコシの研究     | 宮崎農學校   | 長友忠一  |
| 6. 苗代より成熟期までの浮塵子の調査 | 高鍋農學校   | 三好万佐行 |
| 7. タウモロコシの一生        | 高鍋農學校   | 黒木スイ  |
| 8. 藥草に就て            | 宮崎第一高女校 | 田熊節子  |

午 後 の 部 (専門學校)

- |                   |        |       |
|-------------------|--------|-------|
| 1. 藥用植物に就て        | 女子自由學園 | 松田まり子 |
| 2. ハヒマダラメイガの形態及生態 | 宮崎農專校  | 富永禮一  |
| 3. 病原菌に對する電流の影響   | 宮崎農專校  | 梶原敏宏  |
| 4. 宮崎縣における藥用昆虫    | 女子自由學園 | 荒川幸子  |
| 5. 植物の性の分化        | 宮崎農專校  | 内山田博士 |
| 6. ヨシノザクラのかへり咲に就て | 宮崎農專校  | 脇坂幸雄  |
| 7. ダーウイニズムの史的考察   | 宮崎農專校  | 桑原達三郎 |

受賞者

- |               |         |         |
|---------------|---------|---------|
| 中等學校 一等 三好万佐行 | 二等 奥野博司 | 三等 遠山敏子 |
| 専門學校 一等 梶原敏宏  | 二等 脇坂幸雄 | 三等 富永禮一 |

### 昭和二十二年度生物採集品展覽會

日時 十月十五日より三日間

場所 宮崎農專農業博物館

應募採集品 (農專) 宮田富 (大宮郡) 一途山高 (農專) 大和義治

1. 動物に關するもの (中43點 藤本實隆 (文專) 齋藤智西 (農專)

内譯 農專 (10) 田師範 (3) 宮中 (4) 宮農 (2) 中都農 (3)

參考品 市立宮中 (6) 山谷 (高女) 深井由 (中農) 鎌倉木理

2. 植物に關するもの (中22點 (農專) 一國未富 (農專) 新藤由

内譯 鍋農 (20) (第一高女 (6) 第二高女 (8) 女子商 (2)

市立宮中 (2)

受賞者 (農專) 藤本實隆 長半新首 田師範 齋藤智西 宮田富 宮農 中都農 大和義治

専門學校之部 藤本實隆 長半新首 田師範 齋藤智西 宮田富 宮農 中都農 大和義治

一等 農專 福田 浩 (昆虫) 二等 宮師 佐野フヂ子 (昆虫)

三等 宮師 河野佐智子 (植物) 農專 寶滿通泰 (昆虫) 美一北新 女

入選 農專 藤井一美 農專 小野善吉 六和義治 新藤由

中等學校之部 大和義治 宮田富 齋藤智西 長半新首 田師範 齋藤智西 新藤由

一等 第二高女 高橋幸子 (昆虫) 二等 第二高女 吉永靖子 (昆虫)

三等 都農 菅 晋 (昆虫) 鍋農 大山昭子 (水棲昆虫) 女商

佐野ハナ子 (鱗粉轉寫)

入選 第二高女 遠山敏子 (貝標本) 宮中 奥野博司 (昆虫) 鍋農

松岡政吉 (昆虫) 第一高女 新藤陽子 (昆虫) 宮農 中島義人

(ウスバカゲラウの生態)

初級中學校之部 大和義治 宮田富 齋藤智西 長半新首 田師範 齋藤智西 新藤由

三等 市立宮中 松野陽子 (昆虫)

## 宮崎リンネ會會員名簿 (順序不同)

會長 中島 茂 (宮崎農林専門學校教授)

顧問 江崎 悌三 (九州大學教授) 田村 忠雄 (宮崎科學クラブ研究所長)

栗原 定美 (宮崎縣立女子商業學校長)

幹事 藤岡 茂樹 (縣廳林務課) 黒木芳郎 (日東機工) 四本正秋 (宮中)

稻吉 了 (縣立宮中) 松澤 寛 (師女子部) 平田正一 (農專)

清水 薫 (農專) 外山 三郎 (農專) 宮崎義光 (農專) 鮫島徳造

(農專試驗場) 服部新佐 (服部植物研究所) 太田敏雄 (青師)

富永武義 (第二高女) 渡邊茂夫 (第一高女) 佐伯正光 (宮農)

伊藤武夫(都農) 高山彦一(飼肥高女) 富田定(飼農) 萱島泉(鍋農) 國府榮藏(妻女) 猿渡兼純(妻中) 田中一(富農) 日高健一(赤江中學) 一政久良夫(女子附屬) 鎌田政範(都農高原分校) 黒木盛幸(附屬中學) 中村繁(女子商) 谷山壽夫(大宮中學校) 宮川經邦(農專) 富永禮一(農專) 樋口眞一(農專) 關谷昭二郎(農專) 協坂幸雄(農專) 田村光章(農專) 渡邊久夫(農專)

### ○會員

○宮崎農林專門學校 梶原敏弘 首藤幸男 後藤宗嗣 押川泰郎 松田道夫 鎌田康平 吉田博一 橋爪和平 井本義朗 寶滿道泰 川越守 篤喜一郎 鷲頭誠 森山博 名村清 松浦彰一 永井彪 森介計 昌中健一 高月市彦 藤井一美 平田俊彦 木村榮一 須河内省三 室田昇 日名子洋一 福田浩 宇都宮務 江藤博六 前田齊 小野善吉 矢野忍 岡本陽 大藪巳喜男 船橋義成 濱川典昭 鈴木喜代志 吉武貞敏 古瀬帝 大庭光景 森本辰雄

○宮崎師範學校男子部 松田喜一 野脇茂 石瀧武英 長友滿雄 櫻田信夫 隈江日晴 瀧一郎 榑野文敏 横山和行 山本二幸 河野通有

○宮崎師範學校女子部 田中京子 西森みえ子 松本タエ子 山口禮子 河野桂子 恒吉ウメ 藤岡千恵子 佐々木美代子 日高敦子 森葉子 野邊斗南子 七條桂子 河野良子 佐野フヂ子 清頼敦子 川越キクノ 青木信子 日高カズエ 川越克子 荒武和子 黒木俊子 宮尾淑子 長友ミエ 平島フミ子 熊三迫幸 白杵アヤ

○青年師範學校男子部 甲斐健二郎 中原昭二 佐藤松二郎 荒川巖 黒田昭 杉本昭 中邑喜久士 馬渡良弘

○青年師範學校女子部 砂田ミエ子 齋藤エミ子 日高裕子 田爪順子 福山信子 谷山富美枝 吉田智恵 長友智美 杉本恵美子 村社タケ子

○縣立宮崎中學校 山本末之 山口清磨 日高重良 奥野博司 萩野庚雄 枯木滋之 熊本護 大村修一 吉村揚夫 豊岡頸 杉尾哲哉 清水義康 高橋理 篠原恭憲 清水恵三 平野善太郎 後藤好久 三好正巳 佐々木政洋 川崎芳夫 橋本勝郎 和田勉 緒方惟庸 佐藤勝夫 湊均 岡本政司 植木滋之 藤井敏貢 金子明弘 川風順三郎 關正夫 食田裕生 坂本昇 小田原哲生 宮脇繁 青木賢兒 川崎宣夫 淺野浩 岩切俊忠 佐瀬康夫 原田解 平山正徳 甲斐正 後藤直昭 大竹保三郎 古賀幸靖 井上和剛 桐野一洋 渡邊利夫 根井詔 加藤友義 坂口 橋本 落谷直彦

○縣立宮崎農學校 小村通 中島義人 新田厚 土公武尙 高山昭 井上美利 吳本善夫 日高隆 田山地信義 吉田友次 岩切哲夫

- 縣立第一宮崎高等女學校 高木節子 黒木チエ子 黒田ノブ子 中村  
藤 志多美枝 大塚勝子 平林 有馬
- 縣立第二宮崎高等女學校 岡上マチ子 日高千代子 崎山悦子 松浦  
麗子 林和江 高妻陽子 黒木宣子 田島洋子 松田ツギヨ 横尾順子 日高  
スミ 長野榮美 川野久 菊地トヨ子 濱田利子 愛甲千鶴子 川越キヨ子  
年見佳子 吉岡瑠美子 和田民江 仲田加代子 岩切英子 時任節子 首藤テ  
ル子 藤浦タカ子 小松エツ子 吉永京子 安藤ヒロ子 小川ヨシ子
- 縣立宮崎女子商業學校 後藤愛子 山本湧子 山川章子 安藤静代  
佐野ハナ子 大野ハツヨ 松井雪江 桶口道子 井上幸子 石谷フジ子 菊地  
愛子 土井康子 戸高定子 藤澤マツエ 春成昌江 伊藤小美子 洋野康子  
鎌田蓉子 石井スミ子 湯地チカ子
- 縣立高鍋農學校 長友有人 齋藤熊徳 三好万佐行 中東欣吾 野津  
原財 秋山毅 古屋義暉 長友國吉 濱砂隆義 竹下忠雄 黒木竹子 秋月種  
子 新名シヅ子 黒木陸夫 立花節子 黒木満里子 猪股イノ 藥師寺サダ子  
大山照子 橋口惟子 青木恵子 立光美重子 中川節子 濱口須賀子 蓑毛洋  
子 村上美和子 黒木アツ子 館野幸子
- 縣立高鍋中學校 澁谷公明 梶原律男 高橋雄行 川崎拓三 重村壽  
夫 宮本左近 園師攻 藤藪金吾 戸田牧夫 川田章能 海野緑 石崎宗夫  
河野宏正 吉松重弘 宇都宮正明 下田幸弘 岩切裕俊 清郁雄 藤田稔 松  
島驥一 久保田雅也 小野敬一 稻倉宗知 森田愼介 石井季隣 橋口恒男  
久家幸夫 萩原晴明 岩村光俊 多賀順義 井上孝安 和木健一 本田宏 清  
亮二 久米乾一
- 縣立高鍋高等女學校 西村幸子 守部郁子 今藤勝一 佐藤守人 椎  
三江 岩永玲子 宇都宮悦子 財津敬子 月輪明子 戸室美恵子 黒木滋子  
野津原多恵 中村生子 荒木真理子 倉永節子
- 縣立妻高等女學校 橋口チエ 谷相正雄 中村峯子 日高譽子 濱砂  
浩子 帖佐容子 星野節子 齋藤勿子
- 都城農學校高原分校 福留寛 鎌田政範  
宮崎女子自由學園 荒川幸子 石井昭子 松田毬子 田崎昭子 岐部愛子  
日高幸子 永友満里子 松田タヨコ
- 新制中學校 川島驥 横川春江 竹迫洋子 岩村秀 藤井 村上悦子  
谷口和子 田原康男 高橋蘭子 土井朝子 垂水正彦 山内祐一
- 一般之部 原田元八朗 飯田英雄 井之口希秀 南川孝一 長友良子  
税田幸雄 田中勝美 田中實 近木英哉 外山孝雄 山口元美 矢野次郎 矢  
野孝子 日高雄三郎 坂本龍七 秋原濱子 金丸俊夫 菊池哲 福島五男 道  
家剛三郎 外山孝男





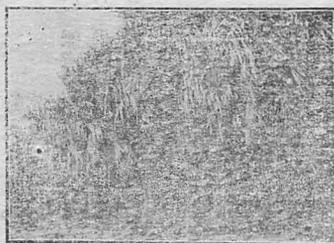
宮崎農專校教官農學博士 中島 茂 共著  
全 校 教 官 清 水 薫

「暖地の動物學」 定價豫定 350圓  
昭和23年6月中旬出來

暖地の動物を友として20有餘年過した中島博士其愛  
弟子清水先生の心血を注いで出來上つた待望の快著

- 第 1 章 緒 言
  - 第 2 章 動物の生態
  - 第 3 章 動物の分類
  - 第 4 章 哺乳類
  - 第 5 章 鳥類
  - 第 6 章 爬虫類
  - 第 7 章 兩棲類
  - 第 8 章 魚類
  - 第 9 章 昆蟲類
  - 第 10 章 蜘蛛類
  - 第 11 章 甲殼類
  - 第 12 章 軟体類
  - 第 13 章 環蟲類
  - 第 14 章 圓蟲類
  - 第 15 章 轉皮類
  - 第 16 章 扁蟲類
  - 第 17 章 腔蟲類
  - 第 18 章 其他の微生物
  - 第 19 章 原蟲類
  - 第 20 章 野生動物の利用
  - 第 21 章 結語 (附) 南日本綜合研究所の提唱
- 索 引

参考圖版 150 を收め暖  
地の動物に關する研究  
を餘すところなき豊富  
なる内容!



限定出版として再版は豫測が出來兼ますので特に事前申込を御受け致します

宮崎市橘通三丁目

發行所 文華堂出版部

振替鹿兒島 10710 番  
電話宮崎 532番



